

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：25302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K03373

研究課題名（和文）幼児期の感情コンピテンスを支える環境的要因の検討 - 居場所感の獲得プロセスから

研究課題名（英文）Consideration of Environmental Factors in Emotional Competence during Early Childhood: The Process of Acquiring 'Ibasho'

研究代表者

芝崎 美和 (SHIBASAKI, Miwa)

新見公立大学・健康科学部・教授

研究者番号：00413542

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：研究1では、母子分離不安が強い3歳児1名を対象に短期縦断的観察研究を行った。園での居場所感が形成されていく過程を4期に分け、居場所感形成のためには、保育者との愛着関係に基づく仲間との多様で豊かな感情のやりとりと、それを可能にする遊び環境が必要であることが示された。研究2では、保育者3名に対するインタビュー調査から、保育者は、母子分離不安の強い幼児に対して、居場所感形成と感情コンピテンスのつながりを意識した関わりを段階的に行っていることが明らかになり、また、保育者や他児との愛着関係だけでなく、登園によって生じた自己効力感によって居場所感形成が促されることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、母子分離不安を抱く幼児が園で居場所感の獲得する過程に感情コンピテンスがいかに関与するかに着目することで、幼児の感情コンピテンスを高める環境的要因について検討を行った。保育者との愛着関係を基盤として仲間関係が形成されるにしたがい、感情表出を抑制していた幼児が多様な感情を他者と安心してやりとりできるようになっていく過程や、感情コンピテンスと居場所感との関係性についての保育者の認識や関わりを明らかにした本研究結果は、保育環境や遊びの中で幼児の感情コンピテンスを高める手がかりとなりうるという点において意義がある。

研究成果の概要（英文）：In Study 1, a short-term longitudinal observational study was conducted on a 3-year-old child with strong separation anxiety. The process of forming a sense of "Ibasho" in nursery was divided into four phases, revealing that for the formation of a sense of "Ibasho", diverse and rich emotional exchanges with peers based on attachment relationships with teachers, facilitated by an environment conducive to play, are necessary. In Study 2, based on interviews with three teachers, it was revealed that teachers engage in interactions with children experiencing strong separation anxiety in a manner that acknowledges the connection between sense of "Ibasho" formation and emotional competence. Furthermore, it was suggested that sense of "Ibasho" formation is promoted not only by attachment relationships with teachers and peers but also by the sense of self-efficacy generated through attending nursery.

研究分野：教育心理学

キーワード：感情コンピテンス 居場所感 母子分離不安 愛着 仲間相互作用 保育者

1 . 研究開始当初の背景

感情は、安心できる環境、すなわち、「居場所」と認識される環境において表出されるものである。居場所は、自己受容感、自己肯定感、自己存在感、安定感などを実感させてくれる場所である(住田, 2003)。年齢の低い子どもは、集団保育に参加した当初は、母親との分離不安から、激しい混乱を示す可能性が高く、母親のかわりとなる保育者の存在が不可欠である(横浜, 1980)。保育者との安定した愛着関係を基礎として、保育の場に居場所を見つけることができた子どもは、他児との間に愛着関係を形成し、仲間の中に居場所を見つけることができ、安心して他者と感情のやりとりを行うことができると考えられる。つまり、幼児の感情コンピテンスは居場所感によって支えられており、居場所感と感情コンピテンスとの結合を強める環境的要因を明らかにすることは、保育者の子ども理解を促し、長期的かつ多角的視点から子どもの発達を捉え、遊びや生活を中心とした教育的支援の枠組みを構築することにつながる。

2 . 研究の目的

本研究では幼児の感情コンピテンスを高める環境的要因を、居場所感の認識、保育者との相互作用を含む幼児教育の質という2つの観点から明らかにする。具体的には、第1に、入園時に母子分離不安から園で居場所感が得られない子どもに注目し、短期縦断的観察研究によって、保育者との愛着関係に基づいて居場所感を形成する過程と感情コンピテンスとの関連性について明らかにする。第2に、居場所感と感情コンピテンスとの結合を強める重要な要因となる保育者に注目し、インタビュー調査を行い、保育環境や遊びにおける居場所感獲得についての保育者の認識と、居場所感と感情コンピテンスとの関連性を意識した働きかけを明らかにすることで、感情コンピテンスを高める幼児教育の在り方について考察する。

3 . 研究の方法

1) 保育者との愛着関係に基づく居場所感の形成過程と感情コンピテンス (研究1)

短期縦断的観察研究の手法を用い、新入園児の中でも母子分離不安が強く、園での生活に不安を抱く幼児を対象に、居場所感の形成過程と感情コンピテンスとの関係性を明らかにする。

調査対象児：母子分離不安が強く、園での生活に不安感を抱く3歳児1名を対象とした。

手続き：タイムサンプリング法を用い、子どもたちと遊びや生活をともにする中で観察を行う。

観察対象児と他児、保育者とのやりとり、観察対象児の言動をフィールドノートに記録し、エピソード分析を行う。

2) 幼児の感情コンピテンスを高める環境的要因についての検討 (研究2)

居場所感やその形成を目的とした関わりについての保育者の認識を明らかにするとともに、居場所感を基礎とした感情コンピテンスを高める環境的要因を明らかにする。

調査対象者：母子分離不安から園で居場所感を形成できない幼児を担当した経験のある保育者3名を分析対象とした。

手続き インタビューによる調査を実施した。

4 . 研究成果

保育者との愛着関係に基づく居場所感の形成過程と感情コンピテンス (研究1)

1) 母子分離不安の解消と居場所の形成過程

母子分離不安が強く、園での生活に不安感を抱く3歳児1名を対象として、観察法を用いた短期縦断的研究を行い、保育者や仲間との愛着形成によって居場所感が形成されていくプロセスを4期に分け、感情コンピテンスとの関連性という視点から検討した。

(1) 母子分離不安が強固でネガティブな感情を強く表出する時期 (期)

期(4月)では、対象児は園での遊び時間の多くを泣いて過ごすことが多かった。外遊び時間では、駐車場を見下ろす位置にある園庭の隅で、フェンスにしがみついたまま大きな声で泣き続けていた。母子分離不安が非常に強く、ふとしたときに母親を思い出して涙が止まらなくなること多かった。また、遊びに没頭したり積極的に仲間と相互作用したりすることは少なく、どのような感情を経験しても、張り付いたような笑顔を崩さなかった。このことから、園での生活は対象児にとって不安感と緊張感をもたらすものであることがうかがえた。

(2) 保育者との愛着関係を基盤として仲間関係を形成し始める時期 (期)

期(5~6月)では、保育者との愛着形成が進み、仲間相互作用が次第に増えた。一方で、母親を思い出して泣き出すこともあり、感情に起伏が見られた。泣かずに登園し母親と別れることができた日は、自己の姿を「泣かずに来れた!(5月)」と振り返り、そこで高められた自己効力感を、「また泣かずに来れる!(5月)」といった、次の登園時の成功予測に結びつけていた。このような日は、他児ともポジティブな感情をやりとりしながら遊ぶことができおり、このことから、登園時の母子分離の状態が、対象児のその後一日の感情に強く作用することがわかる。

他方、母親が恋しくなり「お母さんと遊びたかったのに・・・(6月)」と言いながら涙を流し続け、他児との遊びへの参加を促す保育者の誘いに一旦は応じるものの、途中立ち止まり「ママがバイバイ・・・(6月)」と再び泣き始める姿も見られた。ネガティブな感情はしばらく続くが、

花壇のダンゴムシを他児と観察し言葉を交わす中で硬かった表情が和らぎ、遊びに気持ちに向くようになるなど、仲間との遊びが感情調整に影響することもあった。しかし、仲間との感情のやりとりは多いとはいえ、仲間関係において居場所感が形成されているとはいえなかった。

(3) 保育者との愛着関係を基盤として仲間との遊びに没頭する時期(期)

期(8~9月)では、母親を思い出して寂しさを我慢する姿が見られるが、泣くことはなくなった。ブロック遊びをしている最中、青いブロックを手に取り、「これ泣いている。お母さんに会いたって(9月)」と寂しそうに俯くことがあったが、「これ、お兄ちゃんだから泣かない」「お兄ちゃん、お兄ちゃんだよ。しまうまのお兄ちゃん。で、これ(赤いブロック)がしまうまの赤ちゃん。」と他児が話しかけると、顔を上げ、「見てー。赤ちゃん、赤ちゃん。」と言いながら楽しそうに赤いブロックを動かした。このように、母親を思い出したときの寂しさが、他児との遊びの中で解消されるといった姿も見られるようになった。それでも寂しい時には保育者の傍で過ごすこともあり、保育者と一緒に絵本を読んだりままごとをしたりと、対象児の気持ちの受容に努めていた。一方で、平行遊びをしていた対象児と他児にお皿のお寿司と一緒に食べるよう促す(9月)など、遊びを介して対象児と他児とを繋ごうとする働きかけも見られた。そのため、対象児が他児の隣に座って寛いだり、ともに遊びに没頭する姿も見られるようになった。

遊びへの夢中度が高まるにつれ、仲間との対人葛藤も増加していった。おもちゃの貸与を断られた他児の姿を観察した後、実際には近くにいない保育者の存在を引き合いに出し(保育者に)怒られるから、ちょっと貸して(8月)と依頼することでおもちゃの獲得に成功するなど、問題解決能力や交渉能力といった社会的スキルの高まりが見られるようになった。また、遊びの中で表出される感情が急激に広がり、期に見られたような「張り付いた笑顔」はなくなり、声を立てて笑ったり、怒った顔で「いやだ!」と他児の要求を拒否する姿も見られるようになった。このように、期では、遊びの中で安心して感情を表出することが多くなり、仲間関係において居場所感が形成されつつあることがうかがえた。

(4) 母親についての対象の恒常性が獲得され仲間との間で居場所感が形成される時期(期)

期(10~12月)では、母親のことを笑顔で語る姿が見られ、対象の恒常性が確立されたことがうかがえた。外遊びの準備をしながら「今日はママと来たのだ(11月)」と嬉しそうに語り、砂場に駆けだしていく姿などからも、母子分離不安は解消されていると推察された。表出される感情の種類が増え、「涙を流して笑う(11月)」「足を踏み鳴らして怒る(11月)」といった豊かな感情表出もみられた。他児と安心して様々な感情のやりとりを行っており、遊びへの夢中度も高い。このことから、対象児が仲間関係において居場所感を形成していると推察される。

2) 母子分離不安の解消と居場所の形成に伴う感情表出の変化

母子分離不安が解消され、保育者や仲間との関係性において居場所感が形成されるにつれ、幼児の発話や感情表出にはどのような違いが生じるのであろうか。このことを確認するために、各期における対象児の発話に着目し、時期および対象による違いについて分析を行った。なお、期では、自由遊び時間の多くを母親を想起して泣いて過ごすことが多く、他児との相互作用があまり見られなかったため、分析対象は ~ 期のものとした。

(1) 保育者と他児に対する発話の違い

対象児の発話を10カテゴリー(自己主張、質問、提案、依頼、拒否、応答、模倣、独り言、許可、無反応)に分類し全体の発話数に占める各発話数の割合を算出した。

保育者に対する発話については、~ 期いずれも自己主張が最も多かった。また、応答や独り言に関しても、時期によらず一定程度の発話数が確認された。期に増加したのは提案であった。期は、保育者との愛着関係を基に他児との関係性を形成する時期であり、この時期における応答の多さは、対象児に対する保育者の働きかけの多さを意味している。このような積極的姿勢によって対象児は保育者との間で愛着関係を形成し、それによって対象児から保育者への働きかけである提案が増加するという期における姿が生じたと考えられる。

他児に対する発話に関しては、~ 期にわたって自己主張が最も多く見られたという点は、保育者に対するものと同様である。期以降に増加したのは他児の言動の模倣であり、期になって増加したのは独り言で、反対に減少したのは質問、提案であった。特に平行遊びにおける他児の模倣は、遊びのイメージの共有を助ける。期における模倣の多さは、対象児が他児と自発的に関わろうとしている意志の表れであるといえよう。また、独り言は、思考を整理する際に見られるものであり、期における増加は、対象児が遊びの世界に没頭し、夢中になっていることを意味するものであるといえる。

(2) 自己主張に伴う感情の変化

~ 期にわたり、一貫して自己主張の生起頻度が最も高かったが、そこに伴う感情には時期による変化が見られるのであろうか。感情を3つ(ポジティブ、ネガティブ、ニュートラル)に分類し分析したところ、自己主張に伴う感情には時期による違いが見られた。期ではポジティブ感情(51.4%)とニュートラル感情(40.5%)がほぼ同程度見られたのに対し、期ではポジティブ感情(60.9%)の生起頻度が最も高かった。期になると、ポジティブ感情(42.1%)とネガティブ感情(42.1%)が同程度の高さでみられるようになった。

期では、保育者との愛着形成が進み、仲間相互作用が徐々に増えていったが、母親を思い出して泣くなど、感情には揺れが生じていた。また、泣かずに登園できた自分を誇らしく振り返る姿から、園で泣かずに過ごしたいという思いが対象児に生じていることもうかがえた。この時期

において、ポジティブ感情とニュートラル感情を伴う自己主張が高頻度で見られるのは、「保育者や他児とのやりとりが楽しい」、「母親と別れてさみしいが泣きたくないため感情を抑制しよう」という2つの思いによるものではなかろうか。

期になると、他児との遊びに没頭する姿が多く確認された。この時期においてポジティブ感情を伴う自己主張が最も多いという結果は、対象児が他児との遊びに楽しさや喜びを感じていることの表れであるといえる。

他方、期になると、ポジティブ感情とネガティブ感情を伴う自己主張が同程度の高頻度で見られるようになる。期では、仲間との遊びにおける夢中度高まりが見られたが、それは、主体的な遊びの中で様々な感情を経験することにつながる。他児と欲求がぶつかる中で、ネガティブな感情を経験することも増える。嬉しさや楽しさといったポジティブな感情だけでなく、悔しさや腹立たしさといったネガティブな感情も経験し、表出することは、感情コンピテンスの発達という点において重要である。ポジティブな感情だけでなく、ネガティブな感情をも安心してやりとりできるといった感情コンピテンスの高まりは仲間関係において対象児が居場所感を獲得したことを意味するものである。

・ 幼児の感情コンピテンスを高める環境的要因についての検討（研究2）

保育者3名（以下、保育者A,B,C（各、対象児A,B,C担当））が担当した幼児が母子分離不安を抱く背景は様々である。3名の幼児が母子分離不安を解消させ、園で居場所感を認識しつづるとみなされたのは、母子分離不安開始からいずれも6~12か月程度後のことであった。

1）園での生活に対する対象児の認識

まず、対象児A,B,Cの母子分離不安の様相について、保育者A,B,Cの認識を整理する。

対象児A（年少児）の母子分離不安は、入園当初から見られていた。4月当初は、母親と別れるときだけでなく、ふとした瞬間に母親を思い出した時や、母親が登場する絵本を読んだときに涙が出ていた。「母親に自分を見てほしい」という思いが強く、泣くことで母親を困らせ、注意を引こうとしているように思われた。一方で、友達に対しては、恥ずかしさや緊張感が生じることが多く、当番活動などで人前に立つことも嫌った。他児との遊びに上手く入ることができない一因として、登園時間の遅さがあげられた。

対象児B（年少児）の母子分離不安も、入園当初から確認されていた。園では泣ぐみ、不安そうな表情で過ごすことが多かった。「園に行かなければならない」ことは理解しており、母親と一緒に泣きながらでも登園してきていた。

対象児C（年中児）の母子分離不安は、母親が出産し、育児休暇を取得した5月頃から始まった。対象児Cは、母親が在宅していることを知っており、夏ごろには園で涙を流すことが増えた。泣きながらでも一人で歩いてくる姿が見られ、対象児の涙は、「私を見てほしい」という気持ちの表れであると感じられた。

2）段階的な居場所感形成と感情コンピテンスの向上を目的とした保育者による働きかけ

対象児A,B,Cの母子分離不安の背景や、園での生活に対する認識には相違が見られる。それに対し、保育者A,B,Cが示す働きかけには多くの共通点が見られた。

（1）母親からの協力

幼児が園で居場所感を形成するためには、「園が楽しい場所である（保育者C）」と幼児が認識することが何より重要である。母子分離不安が最も強く出る登園後、園で一日を安心して過ごすためには「朝崩れない（保育者A）」「遊びにプラスのイメージをもってもらう（保育者B）」ことが大切である。そのためには母親の協力が不可欠であると保育者は認識しており、「朝、子どもにタッチしてから別れてもらうように（保育者A）」したり、「玄関先ではなく保育室にまで入ってもらい、朝の準備やシール帳へのシール貼りを見守ってもらう（保育者B）」だけでなく、「遊び開始時までいてもらう（保育者B）」といった協力を母親に依頼していた。母親はこれらの依頼を肯定的に受け止めており、保育者の依頼に応じて子どもの気持ちが遊びに向かうまで保育室にとどまり「子どもが遊びに集中したらそっと帰る（保育者B）」ようにしていた。

母子分離不安を解消するためには、母親に対する対象の恒常性を幼児が獲得することが重要である。保育者が試みた母親との連携は、対象の恒常性の獲得を促し、幼児が安心感をもって園での生活を送ることに貢献するものであるといえる。

（2）友達、仲間の力

対象となった年少、年中の時期は、仲間関係に著しい発達が見られ、仲間と繋がり遊ぶことに喜びが見いだされる時期である。この時期における幼児の分離不安の解消方法として、仲間の力に頼る保育者の姿が確認された。その方法にはいくつかのタイプがあり、1つ目は、「外の遊具や友達に目を向けてもらう（保育者B）」、あるいは「今日の遊びを何にするかをまず決め、友達が群がってきたら集団に任せる（保育者B）」のように、仲間や遊びに対してポジティブな注目、姿勢を形成することを助け、遊びを介して仲間との楽しい園生活を促そうとするものである。

友達との遊びや関わりを楽しいと認識するためには、幼児が友達の存在を肯定的に捉える必要がある。2つ目の関わりとして、友達についてのポジティブな言語的表現がみられた。「『来ないで』と友達を拒んだときは、友達は優しくしてくれる相手だよ、怖くないよと伝えるようにした（保育者A）」などの関わりを繰り返し受けることで、幼児は保育者以外の他者との間で愛着関係を築き、それは園での安心感や居場所感の形成を助けるものであると推測される。

また、3つ目に、「『ちゃん（他児）も寂しかったけど、部屋まで頑張ってきたんよ』と、

仲間の成功体験を語って聞かせる（保育者 B）」ことで、母子分離不安解消のイメージを幼児が持てるようにし、園での生活を肯定的に捉える手助けをしていた。幼児自身、「園に行かないといけないことは分かっている（保育者 B）」ため、涙を流しながら登園することも多かった。保育者は、「（お母さんと）離れるのはさみしいよね。お母さん大好きだもんね。（保育者 B）」と、その気持ちを受け止めつつも、同じ経験をした仲間の姿を伝えることで、幼児の園での孤独感を和らげ、「泣きながらでも来る（保育者 B）」という姿が、遊びや友達などの「他（のこと）」に目を向けられる（保育者 B）」姿に変容することを期待していた。

（3）園での居場所感構築についての保育者の認識：感情コンピテンスとの関連性

母子分離不安は、短期間において容易に解消されるものではない。母親についての対象の恒常性を獲得し、保育者や他児との間で愛着関係を形成しながら、園での遊びや生活を楽しいと認識していく中で、漸進的に解消されていくものである。したがって、保育者には、感情の当事者である幼児の気持ちに寄り添いながら、幼児が他者と安心して感情のやりとりを行い、ゆっくりと居場所感を形成していくことを助ける姿勢が求められよう。以下では、母子分離不安を持つ幼児に対する 3 名の保育者の認識と対応から、居場所感の獲得と感情コンピテンスの関連性について考察する。

担任への安心感、居場所感

保育者 A, B, C はいずれも、「我慢して黙るよりは泣いた方がいい（保育者 A）」『泣いたらだめ』ではなく、『離れるのはさみしいよね、お母さん大好きだもんね。』と共感する（保育者 B）」「気持ちを受け止める（保育者 B, C）」と、母子分離不安から生じる泣きに対し、ポジティブな見方を示していた。そのうえで、「泣きながらでも自分の気持ちが言える（保育者 A）」から、「泣かずに言える（保育者 A）」といった、感情コントロール力の向上を意識した関わりを日々行っており、「泣かずに困ったことが言えるように（保育者 A）」なるためには、まずは、保育者への安心感を形成することが重要であると考えていた。例えば、「対象児を膝に乗せて絵本を読む（保育者 A）」、常に対象児をみんなで気にかけるため「大人の力がたくさん入る（保育者 B）」、「寂しい気持ちを受け止める（保育者 B, C）」だけでなく、「あえて楽しい違う話題をする（保育者 C）」『母』、『さびしい』を忘れるような会話（保育者 C）」を心がけたり、会話の中で「笑うタイミングをみつけ、感情が上向きになったタイミングで遊びに促す（保育者 C）」のように、ポジティブ感情が安心感を高めることを意識した関わりも確認された。

母子分離不安が強く、安心した園生活を送れない幼児にとって、園でまず愛着を形成する対象は保育者であろう。インタビュー内容からは、母子分離不安について、保育者が前向きな捉えをしており、幼児が「泣く」「笑う」といった感情のやりとりを安心してできることこそが、園での居場所感形成の前提であると保育者が認識していることがわかる。

他児への安心感、居場所感

対象児 A, B はいずれも新入園児であり、母子分離不安の強さから、他児への興味関心が低い、あるいは他児に対してネガティブな捉えを行っていた。そのため、保育者は「友達に目を向けてもらい（保育者 B）」、「友達は怖くない（保育者 A）」といった認識を繰り返し伝えていた。「友達は優しくしてくれる相手（保育者 A）」であるという認識によって、仲間関係における居場所感形成を促そうという保育者の思いがそこからは読み取れる。

また、仲間関係において居場所感を形成する上で遊びは不可欠であるという保育者の思いは、「今日の遊びを何にするかまず決め（保育者 B）」、「友達が群がってきたら集団に任せる（保育者 B）」といった働きかけからも分かる。「楽しい」という感情は居場所感を構成する重要な要素である。幼児が他児との関係性や遊びの中で「楽しい」感情を経験し居場所感を形成するためには、まずは保育者自身が「幼稚園は楽しいところと分かってほしい（保育者 B）」といった意識を持ち、「幼稚園は楽しいと思えるような関わりを心がける（保育者 B）」ことが重要であろう。

自分への肯定的見方

母子分離は、幼児にとって大きなストレスであるが、自分自身を前向きに捉える機会であると考えられることもできる。保育者 C は、泣きながらでも母親と離れることができた対象児 C に対し、「バイバイできたね。すごいね！」と言葉をかけることで、「私できた」という自己効力感を高めたいと考えていた。「私できた」という成功体験は、その後の活動に対する前向きな姿勢を形成するものであり、『私できた』と感じ、前向きな気持ちから活動に向かったほしい」という保育者 C の言葉からも、母子分離不安を抱えて登園することを、「幼児が自分を前向きに捉え、『自信（保育者 C）』をつける機会である」と保育者が捉えていることがわかる。

また、保育者は、「来てくれたの？すごいじゃん！ありがとう（保育者 C）」と声をかけることによって、「保育者にとっての自分の存在意義」、すなわち自己有用感を高めるよう努めていた。登園した自分を喜ぶ保育者の姿を確認したとき、幼児は、自分がいること自体が誰かの役に立っていると実感できるであろうし、それは、園での居場所感を構成する要素の 1 つになる。

幼児が園で居場所感を認識するためには、何よりも、保育者や他児と安心して感情のやりとりができることが重要である。特に、3 歳とは自己中心性からの脱却が図られていない時期であり、嬉しい時に笑い、要求が叶わないと怒るといった感情が当たり前に表出される時期である。本研究では、母子分離不安の強い幼児が園で居場所感を形成するためには、保育者との愛着関係に基づく、仲間との多様で豊かな感情のやりとりと、それを可能にする遊び環境が必要であること、環境要因の 1 つとして、居場所感と感情コンピテンスとのつながりを意識した保育者の関わり的重要性が示された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 芝崎美和・芝崎良典	4. 巻 43
2. 論文標題 協同学習における子ども理解：領域「人間関係」における事例検討から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 新見公立大学紀要	6. 最初と最後の頁 43-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 芝崎美和・芝崎良典	4. 巻 42
2. 論文標題 謝罪についての被害者の認知：加害者の謝罪に関する情報と被害者のパーソナリティに着目して.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新見公立大学紀要	6. 最初と最後の頁 23-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 芝崎美和・芝崎良典	4. 巻 41
2. 論文標題 被害者は加害者をいかに認知するか：2つの謝罪情報の処理に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 新見公立大学紀要	6. 最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 芝崎良典・芝崎美和	4. 巻 6
2. 論文標題 UPI (University Personality Inventory) は退学を予測することができるか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 四国大学全学共通教育センター年報	6. 最初と最後の頁 47-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 芝崎良典・芝崎美和	4. 巻 53
2. 論文標題 大学生の心の健康度は4年間でどのように変化するのか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 四国大学紀要人文・社会科学編	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 芝崎美和	4. 巻 44
2. 論文標題 幼児の非認知能力を育む：協同学習による発達理解と援助理解	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 新見公立大学紀要	6. 最初と最後の頁 21-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 福武幸世・芝崎美和・渡部昌史	4. 巻 42
2. 論文標題 保育者養成校の学生を対象としたダンス指導の困難さと改善方法 - A大学1年生を中心に -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新見公立大学紀要	6. 最初と最後の頁 35-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 芝崎美和・芝崎良典
2. 発表標題 被害者は加害者をいかに認知するか:2つの謝罪情報の処理に着目して
3. 学会等名 日本教育心理学会第63回総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 芝崎良典・芝崎美和
2. 発表標題 休日の座位時間が認知機能に及ぼす影響
3. 学会等名 日本教育心理学会第63回総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 芝崎美和・芝崎良典・湯澤美紀
2. 発表標題 幼児の協同活動における感情の意味
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 芝崎良典・芝崎美和
2. 発表標題 ひとと理解しあえるという思いと孤独感との関連
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 芝崎良典・芝崎美和
2. 発表標題 睡眠量が認知機能に及ぼす影響
3. 学会等名 日本発達心理学会第81回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 齊藤崇・芝崎美和 他12名	4. 発行年 2023年
2. 出版社 教育情報出版	5. 総ページ数 168
3. 書名 資質・能力を育む 保育内容 領域 人間関係 : こどもにとっての人間関係とは	

1. 著者名 外山美樹・湯澤正通・芝崎美和ほか19名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 206
3. 書名 新・教職課程演習第5巻 教育心理学	

1. 著者名 入江慶太・芝崎美和ほか11名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 教育情報出版	5. 総ページ数 168
3. 書名 新・子ども理解と援助：その理論と方法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------